

「地域共生社会」の構築が求められる時代のなかで
～地域で暮らす“ひとり”を大切に、

“ひとり”が大切にされる地域をめざすソーシャルワーク～

同志社大学 社会学部 社会福祉学科

空閑 浩人(くがひろと)

はじめに～私たち支援者が、絶対に「手放してはいけないもの」とは何か(支援の価値と倫理)?～

(1) 中山七里の小説『護られなかった者たちへ』(宝島社文庫、2021年)より

何もすることがなくて部屋に閉じ籠もっていると自分がこの世に一人ぼっちでいるような気になります。でも、それは間違いです。この世は思うよりも広く、あなたのことを気にかけてくれる人が必ず存在します。(中略) あなたは決して一人ぼっちではありません。(468-469頁)

* ソーシャルワークの実践は「あなたは決して一人ぼっちではない」ということを伝え続けること

(2) それでも桜は咲く:「諸君ヨ、人一人ハ大切ナリ」(同志社創立者・新島襄(1843-1890)の言葉)

* ソーシャルワークとは、そこにいる「一人」を大切にす支援の営みであり、そこで暮らす「一人」が大切にされる関係づくりや場づくり、地域づくりのための営み

* 「いま・ここで」の、その当事者・利用者との、出会いとかかわりと時間を大切にすること

(3) 人と社会の新しい「価値観」の創造(糸賀一雄(1968)『福祉の思想』NHKブックスより)

* 人が「生きること、生きていくこと」の基盤が揺らいでいる時代のなかで、人間の「生」のかけがえのなさ、人間と社会の「価値観」(人間とは?社会とは?)についてあらためて考えたい

精神薄弱(原文ママ)という現象が社会で問題となるのは何によってなのであろうか。こういう根源的な問いに誘われることによって、私たちは、社会の構造的な矛盾に目を向けさせられざるを得なかった。そしてその問題性は同時に人間の価値観に私たちをいざなうものでもあった。いふなればこの子たちとの取り組みの歴史は、それはまことにささやかなものでしかなかったけれど、それ自体としては社会のさまざまな矛盾のただなかにあつて、人間の新しい価値観の創造をめざすといった歴史的な戦いの一環であったともいうことができるであろう。それはいまも終わってはいない。おそらくは永遠の戦いでもあろうか。(10頁)

(4) コロナ禍で考えた、それでも「生きていくこと、生き続けることへの肯定」

『自分のため』だけにやっていくことの空虚さに気づき、『人のため』に何かできることはないかと考えることは、とても健全なことだと思います。(中略) いま歌うべきは『生きていくことへの肯定』だと、気づきました(米津玄師(「音楽はどこまで届く～インタビュー・あなたが遠く世界で～)『朝日新聞』2021年1月1日(金・朝刊)』より)

(5) 社会の役に立つ・立たないとは無関係に、人間の生は「肯定」されるべきもの

○僕たちは一人の人間としてこの世に生まれてきて、その命というのは絶対に尊重されなくてはいけない。それを奪うことはいかなる場合も許されない。徹底して、すべての人の命の価値は保障されなくてはいけない。役に立つから生きていいとか、役に立たないから死ななきゃいけないなんていう理屈は間違っていて、それよりもはるか以前に、人間の生は肯定されるべきものです。(195頁)

平野啓一郎「悲しみとともにどう生きるか」(柳田国男/若松英輔/星野智幸/東畑開人/平野啓一郎/島菌進/入江杏(2020)『悲しみとともにどう生きるか』集英社新書、157-205頁)

1. 地域で孤立して、自ら支援を求めてこない（「助けて」と言わない）人々の存在

（1）なぜその人々は支援を求めない（「助けて」と言えない）のか？

複雑な生活課題を抱えた子どもと家族は、なぜ支援を求めないのであろうか。閉ざされた家庭にいる人は、「支援者の顔は笑っていても、目は笑っていない」と語る。困っているときには放置し、問題がどうしようもなく膨れあがってから笑顔で近づいてくる支援者への敵意がある。その根底にあるものは、助けを求めようにも迷惑だと避けられ、あるいは偏見によって拒まれてきたという体験であり、社会に対する不信である。（中略）その結果として、子どもと親は well-being への意欲や将来展望を抱けず、諦めや不信を表出して、社会との関係を閉ざしている。（104 頁）

（金子恵美（2019）「虐待・貧困と援助希求—支援を求めない子どもと家庭にどうアプローチするか」松本俊彦編（2019）『「助けて」が言えない—SOS を出さない人に支援者は何ができるか』日本評論社、）

『「助けて」が言えない』ことや失踪を繰り返すことには、その人なりの理由がある。それをけつして否定したり責めたりすることなく、安全で安心できる支援を提供することこそが重要であり、そのための方策にはまだまだ工夫の余地がある。『「助けて」が言えない』ことは、その人の弱みではなく、『「助けて」が言えない』「言ったらさらに尊厳を奪われる」状況をつくりだしていく社会の仕組みの側にこそ課題があるのではないだろうか。少なくとも支援者の立場に身を置くならば、このような問題設定のもと、みずからの拠って立つ支援構造の問い直しを含めて考えることが必要であろう。（200 頁）

（熊倉陽介・清野賢司（2019）「どうして住まいの支援からはじめる必要があるのか—ホームレス・ハウジングファースト・援助希求の多様性・つながりをめぐる支援論」松本俊彦編『「助けて」が言えない—SOS を出さない人に支援者は何ができるか』日本評論社）

（2）安全で安心なコミュニケーションの経験から、社会や地域への信頼を取り戻す

- ①自己責任や自助努力ありきの価値観が社会に蔓延するなかで、自らの状況を何とかしたいともがきながらも、社会からの否定的なまなざしの前に苦しみ、徐々に他者や社会への信頼を亡くし、やがてあきらめの気持ちとともにSOSを発しなくなり、そして支援をも拒否するに至ることを、関係的・社会的・構造的に強いられた状況がある
- ②そもそも孤独・孤立のなかにある人々（本人や家族）が、他者や周囲に心を閉ざすのはなぜか。専門職に相談しないのはなぜか。なぜそれらの人々は支援を拒否するのか？
- ③その背景にあるのは、自らの状態を周囲から問題視され、否定され、また専門職や支援者からは、（暗黙裡のうちに）一方的に改善や解決すべき対象と見なされてきた経験ではなかったか？
- ④社会から「信頼」されていないという経験の積み重ねが、社会に対する不信感をもたらしているとは言えないだろうか。自分が専門職や支援者から信頼されていないという経験が、専門職や支援者を信頼しない背景にあるとは言えないだろうか？
- ⑤その人が支援者に「本音」を言わないということは、本音を言えなくさせられている支援者との関係や状況があるということ、支援者から期待されること、支援者の意向に沿うことを言わざるを得ない支援者との関係を経験していることの現れと捉えることができるのではないか？
- ⑥支援者にとっては「支援」しているつもりが、本人にとっては「蔑まされる」「排除される」ような経験となつてはいないだろうか？
- ⑦本人にとっては、その状態や自らの気持ちや葛藤が、否定や批判されることなく受け止めてもらえる、安心で安全なコミュニケーションの体験の積み重ねと、そこから、支援や社会に対する「信頼」を取り戻すかわりや働きかけが必要
- ⑧支援者の側からだけでなく、「本人の側から」「親子の側から」「家族の側から」の視点で考える、振り返る（相手の側に立つての「想像力」の大切さ）（「想像する力」→「創造する力」）
- ⑨求められるのは、その人とその「生」に対する「肯定」と「尊重」、そして「信頼」のメッセージを伝え続ける支援や支援関係のかたち

2. 人間の「生」の肯定とその「尊厳」を社会的に守る営みとしてのソーシャルワーク

(1) 人間の「生」は他者や場所との「かかわり」「関係」「対話」の中にある

- ①人間の「生」は決して、「個」「個体」としての自らの中だけで完結するものではない
- ②誰もがもつ「個」や「個体」としての、言わば「不完結さ」や「不完全さ」を、他者と互いに補い合うことで、人は人間として生きていける（「ヒト」ではなく「人」に対するソーシャルワーク）
- ③人間の「生」の豊かさは、その人が経験する他者や場所とのかかわりやつながりの豊かさである
- ④したがって、その人がいま生きていることに対して、支援者がかかわり、つながり続けていること、そばに居続けていること、その営みそのものを大切にしなければならない。
- ⑤そして、たとえすぐには問題が解決されなくても、支援計画通りに進まなくても、支援というかたちにならなくても、今かかわっていること、今つながっていること、今傍らに居ること「それ自体」に、その人の「生」を支える意義と役割があることを見出していきたい
- ⑥その実践が、必ずしも問題解決や支援という形にならなくても、それでも「かかわり、つながり続ける」「傍らに居続ける」ことから降りないソーシャルワークの意義と役割がここにある

(2) 人間の「生」の「肯定」と「幸せ」のために

- *「自己肯定感」や「自尊感情」は、決して自分自身のなかから自然に生じる、育まれるものではなく、他者からの愛情や感謝、承認や尊重によって、その人のなかに生まれ、育まれる

では、「私は私である」という自己同一性を支えているこの自己肯定の力はどこからやってくるのだろうか。（中略）その力は、「あなたがあなたであることはよいことだ」という他者のメッセージからやってくる。しかも、その「よい」には理由はない。ただ「あなた」がいるということがそれだけでよいことなのである。（藤谷秀（2001）『あなたが「いる」ことの重み』青木書店、12頁）

- *私たち支援者は、一人ひとりの利用者に対して、その存在を「肯定」する（「あなたがそこにいることはよいこと」という）メッセージを、伝え続ける、発信し続ける「他者」である

- *その「生」が「幸せ」であるための条件とは何か（住野よるの小説より）

「幸せとは何か」 私が正面の空に体を吸い込まれてしまいそうだなと思っていたら、南さんが突然言いました。（中略）南さんは、もったいぶったように私の目をじっと、前髪の奥の目で見て、それからやっぱり大事なことは私の方は見ず、ただ前の空を見ながら、ぼつりと床におくように言いました。「自分がここにいていいって、認めてもらえることだ」

（住野よる（2016）『また、同じ夢を見ていた』双葉社、84-85頁）

- *支援とは、その人が「自分はここにいていい」と思える関係や場所（居場所）をつくること
- *自分の存在を他者から認められ、肯定され、尊重されるつながりが保証された「居場所」があることは、人が生きて生活していくために欠かせないことであり、生きるための基盤となる
- *その人が大切にされる関係、その人の居場所となる場や機会をつくることを通して、その人の「生」を「社会的（ソーシャル）に」支える営みがソーシャルワークである

3. その人が「生きること」を支え、共に生きる地域をつくるソーシャルワーク

(1) その人が「生きてこそ」のソーシャルワーク・相談支援

- *国連難民高等弁務官、国際協力機構理事長として、人道支援・復興支援の現場に携わってきた緒方貞子（1927-2019）の言葉から

生きているからこそ、保護ができるのです。とにかく生きる。生き続けられるようにするというのは、基本的なことだと思いました。（42頁）

最終的には、やっぱり、命を守るということでしょうね。（中略）「生きてもらう」ということに尽きるんですね。（中略）それが人道支援の一番根幹にあるんだと思う。判断をするとき、まず、生きてもらう方法を考えるんでしょうね。（68頁）（緒方貞子（2013）『共に生きるということ』PHP研究所）

(2) 『ONE PIECE』とソーシャルワーク（一人で抱えなくても、がんばらなくてもいい社会に向けて）

* 「地域共生社会」とは何か？「共に生きる」とはどのような状態やあり方なのか？

漫画「ONEPIECE（ワンピース）」をご存じでしょうか。1997年から『週刊少年ジャンプ』（集英社）に連載されている尾田栄一郎さんの作品です。海賊となった主人公の少年モンキー・D・ルフィが、「ワンピース（ひとつなぎの大秘宝）」をめざして仲間とともに旅をする冒険物語です。

仲間を集めて本格的に航海に乗り出した主人公モンキー・D・ルフィが、第90話「何ができる」のなかで以下の言葉を叫びます。

何もできねえから、助けてもらうんだ!!! おれは剣術を使えねえんだ コノヤロー!!!
航海術も持ってねえし!!! 料理も作れねえし!! ウソもつけねえ!!
おれは助けてもらわねえと 生きていけねえ自信がある!!!

（尾田栄一郎（1999）『ONEPIECE 第10巻』集英社）

今日、「地域共生社会」すなわち「共に生きる地域社会」の実現をとということがいわれています。（中略）しかし、そもそも共生とは何でしょうか。共に生きる社会とはどのような社会なのでしょう。その答えが、ルフィの言葉にあると思うのです。それは、堂々と「助けて」といえる相手や場所、助けてもらえる関係、お互いに助け合える関係がある、そんなつながりが共有された社会のあり方だと思います。さまざまな制度を必要な人が権利として利用できる社会のあり方だと思います。ルフィのように自分ができないことを認め、誰かや何かに助けてもらうことへの申し訳なさや後ろめたさ、ためらいや気後れを感じなくてもよい社会のあり方だと思います。安心して助けてもらえる関係があってはじめて、私たちは生きて生活していけるという認識が共有された社会のことだと思います。（空閑浩人（2016）『ソーシャルワーク論』ミネルヴァ書房「あとがき」より）

* 子どもたちが、笑顔で、当たり前、「毎日おなかいっぱい食べられる日々」を守りたい

【『ONE PIECE』「ワノ国編」より】

たま（生まれてはじめておしるこを食べた嬉しさを流しながら）

「んめえ〜!!!なんてうめえ食べ物なんだ〜!!!」「わーい!!今日は最高の日でやんす!!!」

お鶴「あんな子供はざらにいますよ このワノ国にはね・・・」

ルフィ「あんなチビ助が腹いっぱいメシ食べねえなんて・・・!!!」

.....

（リンゴを手に持って、どきどきしながら、喜んで食べるたまに対して）

ルフィ「たま・・・!!こんくらいで喜ぶな 当たり前にしてやるから!!」

おれ達がこの国出る頃には! お前が毎日腹いっぱいメシ食べる国にしてやる!!!」

（『ONE PIECE』第91巻・第918話「ルフィ太郎の恩返し」より）

(3) 「暴走」なんかしている場合じゃない!?（2011年4月18日『読売新聞』東京朝刊）

「地震を機に暴走族解散 今後はボランティア従事（茨城）」

大洗町を拠点に活動していた暴走族の解散式が17日、水戸署で行われた。今後、津波で大きな被害を受けた同町の復興のため、がれきの後かたづけや浜辺の清掃などを行うボランティアチームとして再出発する。解散したのは、同町の高校生など15人で構成された「全日本狂走連盟愚連隊大洗連合ミステイヤー」。メンバーが入れ替わりながら約30年間、同町や水戸市などで、集団でバイクを乗り回し、爆音を響かせてきた。解散のきっかけは東日本大震災。避難所などで「敵」と思い込んできた近所の大人や警察官から「飲む水はあるのか」などと気遣われ、「暴走なんかしている場合じゃない」という気持ちが強くなったという。泥まみれになった町役場の清掃に参加するメンバーも現れた。解散式では、暴走族の少年総長（16）が「今まで地域の人に迷惑をかけた。今後、暴走行為は行わない」と宣誓書を読み上げた。「族旗」も水戸署大洗交番所長に手渡し、同町職員や警察官らから拍手が送られていた。総長は「これからは同じ境遇の少年たちも巻き込んでボランティアとして頑張りたい」と誓った。

* そんなこと（自傷行為、暴走行為、非行、薬物、犯罪・・・）までやらなくても、「自分をちゃんと見てくれる」地域の大人との出会いやつながり、かかわりや環境の大切さ

(4) それでも「生きていく」「生き続ける」ことを支えるソーシャルワーク

*なぜ「鬼滅の刃」とソーシャルワークなのか？

【①「それでも生きていくことに寄り添い、かかわり続けるソーシャルワーク】

失っても 失っても 生きていくしかないです どんなに打ちのめされようと

(by 竈門炭治郎 (『鬼滅の刃』第2巻、第13話「お前が」より)

【②つながる、つなげる、つながり続けることから生まれる力への信頼と可能性を追求したい】

一人でできることなんてほんのこれっぼっちだよ だから人は力を合わせて頑張るんだ

(by 竈門炭治郎『鬼滅の刃』第14巻、第117話「刀鍛冶」より)

【③人の「弱さ」を認め「弱さ」がもたらす可能性と強さを信頼するソーシャルワークでありたい】

一番弱い人が 一番可能性を持ってるんだよ 玄弥

(by 竈門炭治郎『鬼滅の刃』第20巻、第172話「弱者の可能性」より)

おわりに～専門職としての「誠実さ」をもって、一人が大切にされる地域を「ともに」築く～

①ペストと闘う唯一の方法は「誠実さ」(それは「自分の職務を果たす」ということ)

「今度のことは、ヒロイズムなどという問題じゃないんです。これは誠実さの問題なんです。こんな考え方はあるいは笑われるかもしれませんが、しかしペストと闘う唯一の方法は、誠実さということですよ。「どういうことです、誠実さっていうのは？」と、急に真剣な顔つきになって、ランベールは言った。「一般にはどういうことか知りませんがね。しかし、僕の場合には、つまり自分の職務を果たすことだと心得ています」(カミュ著・宮崎嶺雄訳(1969)『ペスト』新潮文庫、245頁)

*私たちの職種や立場、機関や施設の種別を超えた、誠実な「連携」と「協働」が求められる時代

②社会や地域を良くしたければ、まずは「専門職としての自分自身を新たにすること

*「地域共生社会」と唱えているだけで、地域が勝手によくなるわけではない！？

*マイケル・ジャクソンの「Man in the mirror」(1988)はソーシャルワーカーの歌！？

*「鏡に映るその人からはじめよう。もしも世界(社会、地域)をより良い場所にしたいなら、まずは自分自身(鏡に映るその人)を見つめ、新たにしよう」

I'm starting with the man in the mirror I'm asking him to change his ways

And no message could have been any clearer If you want to make the world a better place

Take a look at yourself, and then make a change ("Man in the mirror" by Michael Jackson)

③“ひとり”を大切にされた支援と“ひとり”が大切にされる地域を、自分たちで「ともに」つくること

「だからぼくらはぼくらの手でこれからそれをこさえようでないか。」

「またそこで風を吸えばもう元気がついてあしたの仕事中からだいっばい勢いがよくて面白いようなそういうポラーノの広場をぼくらはみんなでこさえよう。」

「ぼくはきっとできると思う。なぜならぼくらがそれをいまかんがえているのだから。」

(宮沢賢治「ポラーノの広場」『ポラーノの広場』(短編童話集)新潮文庫、1995年、470頁)

*誰にとっても住みよい地域づくりはきっとできると思う。なぜなら「私たち」がこうやって(たとえオンラインやリモートであっても)集まって、いまそれを考えているのだから(私たちが集う場や機会への信頼が、支援の意義や地域の可能性を拓け、住み続けたい地域づくりにつながる)

④この時代における「ソーシャルワーク(個別支援と地域支援)」という「希望」

*「ソーシャルワーク」があること、その実践に携わり、地域で働く私たち支援者がいること、そして私たちの事業所が地域にあることは、「この時代」における地域の、社会の「希望」である！

誰かのために、地域のために、本気(マジ)になる

人と社会、そして地域に、本気に、まっすぐに

ソーシャルワークで、(もう一度)前を向く!!!

(by Kuga)